

# 西表島の遺跡

大 城 慧

## 一. はじめに

西表島は竹富島、小浜島、黒島、新城島、鳩間島、波照間島とともに、竹富町の行政区域に入り、八重山諸島中最大の島嶼である。地元では「イリムテイ」と呼称し、さらに古くは(所乃島)、(古見島)とも称されていた。18世紀になって初めて西表島と記録されてくる。島全体が亜熱帯原生林に覆われており、浦内川や仲間川の河口部から上流域にかけてマングローブ林が広がる自然環境となっている。島の大半が国有地で占められ国立公園になっている。また、学術的価値をもつ貴重動植物の生息地となっている。西表島が人間の生活の舞台になるのは、新石器時代前期になってからで、縄文時代後期相当期に始まる仲間第二貝塚(八重山考古学編年上第二期 早稲田編年)を最古とする。歴史時代に入ると西表島に関する古い記録は、15世紀後半に書かれた「李朝実録」の中の金非衣らの祖納での見聞談、朝鮮人漂流記の記事に垣間見ることができる。それ以前の、島に関する記録をとどめる資料はなくバールに包まれたままで、あまり知られていない。遺跡から採集される遺物を介して、断片的に知るのみである。グスク時代、16世紀初め頃には、八重山統治をめざす首里王府の浸透策に対し、当時の英雄オヤケ・アカハチのもと抵抗するが、王府の軍勢に破れ、以後、西表首里大屋子、古見首里大屋子が配置され、首里王府の配下に組み込まれる。西表島に分布する遺跡の大半が、中・近世の時期に集中しており、東部地区から西部地区の海岸線に近接した丘陵台地や低砂丘地に集落遺跡が形成されるところが多い。特に古見、祖納、高那には古い集落形態を残している。八重山考古学編年上第三期から第四期に相当する遺跡である。

祖納半島を中心とした一帯には、入り江が発達し天然の良港を控え、中世から近世の時期の集落が形成された。その村立ての中心的二人の伝説上の人物を排出した地として注目される。一人が慶楽慶田城用緒であり、あと一人が大竹祖納堂儀佐という人物であった。

今回の総合調査は、短期間での日程であることから、過去の調査によって確認されている個々の遺跡の保存状況がそれ以後、どのようになっているのか。あるいは周知の遺跡内での開発行為による遺跡破壊がないか。さらには新たな遺跡の発見がないかということに調査の主眼が置かれた。従って、主として表面踏査からの調査に終始しており、発掘調査を中心とした考古学的調査は出来なかった。

以下、主要な遺跡について概要をまとめてみたい。

## 二. 西表島における考古学研究史

### 戦前の調査

八重山諸島における戦前の考古学的調査は石垣島を中心に各離島を含めて比較的早くから行われた足跡がある。しかしながら、その多くが考古学的手法による本格的な発掘調査によるものではなく、表採的な資料収集調査にとどまっている。西表島もその一つで、明治期に遡る。1889年（明治22年）に田代安定が古見部落での調査を実施している。田代は、植物学研究を始め地理、歴史、言語、民俗と幅広い分野にわたって多くの論文や調査報告を行っている。考古学専門家ではなかったが、古見で採集された陶磁器類の資料を初めて紹介し、曲玉、壺、古茶碗等を、「琉球西表島古見ノ土器」<sup>註1</sup>として発表している。

現在、古見には古見旧村跡遺跡、古見赤石崎遺跡、古見古墓群が確認されているが、田代の表採資料がどの遺跡からのものかは判然としない。採集された陶磁器等の種類から近世の時期に相当するものと判断される。

1893年（明治26年）には笹森儀助が精力的に八重山の島々を広範囲に踏査している。笹森は旧跡や遺物の報告を行っている。その中で曲玉に関する報告<sup>註2</sup>をだしている。

これらの研究は一専門分野からの調査ではなく、歴史、言語、民俗、考古等、多岐にわたるもので、いわば総合的調査研究が行われた時期である。

### 戦後の調査

戦後の調査は、発掘調査による遺跡調査や分布調査など、精力的に行われている。

その成果は、多和田真淳によって「琉球列島の貝塚分布と編年の概念」（『琉球文化財要覧』<sup>註3</sup> 1956年）に報告されている。発見された遺跡は仲間第一貝塚（山城浩・細原徹 1955年）、仲間第二貝塚（多和田真淳 1955年）、西表島大原貝塚（多和田真淳 1955年）、平西貝塚（多和田真淳 1955年）、西表野底貝塚（細原一夫 1955年）、西表島古見赤石遺跡（新城徳裕・山城浩・西大正英 1957年）、西表島大富洞穴遺跡（黒島寛松・多和田真淳 1958年）である。この時期発見された遺跡の大半が、東部地区に集中している。西表島における遺跡分布の基礎的なデータがこの時に整理されてきたと言える。

また、発掘調査は、1959年（昭和34年）に早稲田大学八重山学術調査団の仲間第一貝塚、仲間第二貝塚、平西貝塚がある。1960年（昭和35年）～1962年（昭和36年）には、「琉球列島遺跡調査」の名目によるジョージ・H・ケアの調査が実施されている。調査は沖縄本島から先島の広い範囲に調査を展開している。この時は琉球政府立博物館も調査に参加しており、考古学的調査が実施されている。調査は表面踏査が中心となっており、陶

磁器出土の遺跡がメインとなっている。加えて工芸、民俗、などの調査も行っている。1971年（昭和46年）には、琉球大学による船浦貝塚が発掘されている。1977年（昭和52年）には、青山学院大学による与那良遺跡が発掘されている。1980年代以降は、開発との関連で西表島全域の詳細分布調査<sup>註4</sup>を県教育委員会が実施している。その時、西表島で41ヶ所の遺跡が確認された。その後、追加されて49ヶ所になっている。

また、県立博物館では、1960年から3ヶ年かけて調査された「琉球列島遺跡調査」の再確認調査を実施している。1982年に『沖縄出土の中国陶磁<sup>註5</sup>（上）—ジョージ・H・ケア氏調査収集資料 先島編』、『沖縄出土の中国陶磁<sup>註6</sup>（下）—ジョージ・H・ケア氏調査収集資料 本島編』としてその成果を報告している。特に西表島においては、西表クーラ墓、古見城跡、古見海岸、西表東部ミチヤリ、ピニシ海岸、祖納海岸からの陶磁器を採集している。完形品は少ないが、青磁碗を中心に明代の時期のものがほとんどである。表採された資料はいずれも大形品が多く、器形の復元が可能なものが多い。

1980年代に入ると開発協議に伴う事前の発掘調査が主体となる。発掘調査は、県・市町村の教育委員会が主体となる。調査期間の長期化、発掘面積の拡大など、行政を中心とした緊急発掘調査が増加するようになる。一方、遺跡保存、指定を目的とした調査も行われている。

1988年から1989年にかけては、県文化課による重要遺跡確認調査が実施されており、祖納半島に位置する上村遺跡、1993年～1996年の慶来慶田城遺跡の調査がある。

### 三. 早稲田大学八重山学術調査団による発掘調査

1959年（昭和34年）に八重山地区を対象とした考古学的調査が、早稲田大学八重山調査団（団長滝口宏）によって行われている。西表島においては、仲間第一貝塚、仲間第二貝塚、平西貝塚が発掘され、1960年（昭和35年）にその成果を発表している。調査の目的は、「八重山地域における編年の確立であり、編年にもとづく各遺跡の文化相の分析的研究であり、最後に沖縄史における八重山文化の意義の把握でなければならない」としている。各貝塚の調査概要は次のとおり報告<sup>註7</sup>している。

#### 仲間第一貝塚

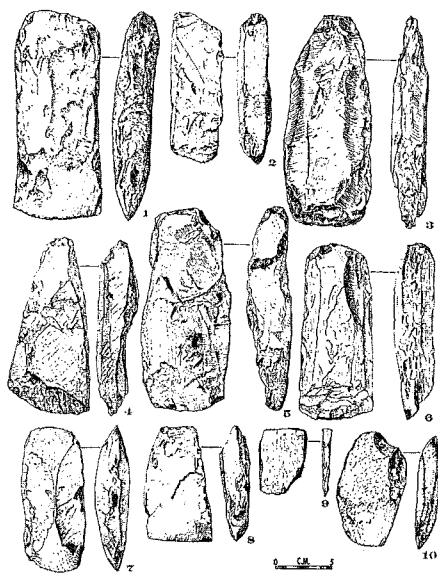
仲間川河口部に位置する面積約500坪にわたる大規模貝塚である。戦後米軍による本橋梁架設工事の際、発見された貝塚である。夥しい貝殻と石器などの遺物が散乱していたとされている。先年多和田真淳・山城浩によって貝塚の南側地点において、2メートル四方の試掘が行われている。早稲田の調査も多和田・山城の試掘地点にトレンチを設定している。

①貝層は20cm～30cm、その下に混土貝層が厚い箇所50cm～60cmの堆積となっている。

貝塚の南側（多和田・山城試掘）において厚くなっている状況が確認されたが、工事によって大部分が破壊されている状況であった。

②遺物は人工遺物と自然遺物が出土しており、人工遺物では石器以外のものは発掘されていない。石器は敲石、砥石の他、石斧が出土している。自然遺物は鹹水産貝類が多く、シレナジミが際だっている。獣類ではイノシシの遺存骨が多量出土した。焼石の出土量が多い。本貝塚は早稲田編年の第一期とし、八重山における最古の遺跡として位置づけている。無土器の貝塚で、土器を有しない文化である。

新石器時代の概念の中で無土器文化が存在することについて「太平洋諸島地域<sup>註8</sup>における原始的文化の中には土器を伴わない例を多くあげることができるその理由は、貝類その他自然物の簡単な加工で容器を間に合わすことができること、粘土を得がたいことなど、他から土器がはいっても、大きな魅力を感じず、技術的に製作するまでに至らなかった」などのどちらかによるものとしている。



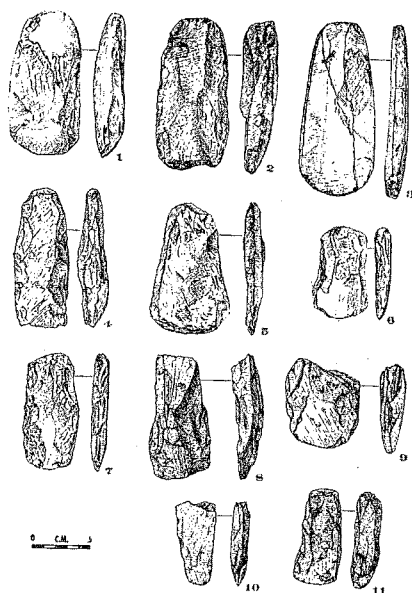
第1図 仲間第一貝塚出土の石斧実測図

『沖縄八重山』より抜粋

### 仲間第二貝塚

仲間側河口部に接した北方の赤土台地にある。貝塚の大半は破壊されており、調査区の設定に難航したようである。貝塚の一角において2メートル×4メートルのトレンチを設定し発掘を行っているが、貝層の保存状態が悪く調査をうち切っている。出土した遺物は石器、有孔貝製品、土器の他イノシシの遺存骨が多量に出土している。

有孔貝製品では、シャコガイに孔を穿つたものが多い。本貝塚から発見された土器は、「波照間島下田原貝塚同様<sup>註9</sup>、八重山諸島域で発見されている土器の中でも最も原始的な段階に位置づけられるものである」としてい



第2図 仲間第二貝塚出土の石斧実測図

『沖縄八重山』より抜粋

る。下田原式土器と呼称されているものである。早稲田編年第二期。八重諸島域の土器の出自を、第二期に位置づけている。この第二期に生活文化の変容があったものか、地元で製作されたものとしている。しかしながら少量の出土と広い範囲において普及発達していった時期ではなかったとしている。その理由として、いまだ自然物容器で間に合った生活が存続しており、土器を必要としなかったものとして解釈している。

### 平西貝塚

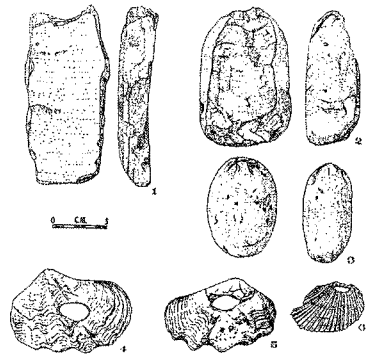
西表島東岸部古見集落近くに位置し、後良川の河口部にある無人の小島である。1955年に多和田真淳によって初めて調査された貝塚である。その後、早稲田の調査では、島の中ほどによった西岸部に小規模のトレンチを下に、黒色土の混土貝層が40~45cmの堆積があり、さらに下層に約30cmの厚さの第二混土貝層、その下に混灰貝層が25~6cmの厚さで堆積していたとされている。

貝層はイシカゲガイを主体とした混土貝層および混灰貝層が区別されている。人工遺物では、混土貝層において、土器が際だって出土しており土器の性格から推して本貝塚が外耳土器文化に属する時期であることが報告されている。(早稲田編年第三期)

### 四. リチャード・ピアソンによる発掘調査

1971年(昭和46年)~1973年(昭和48年)にかけて、リチャード・ピアソンによる琉球の考古学的調査の一環として船浦貝塚<sup>註10</sup>を調査している。

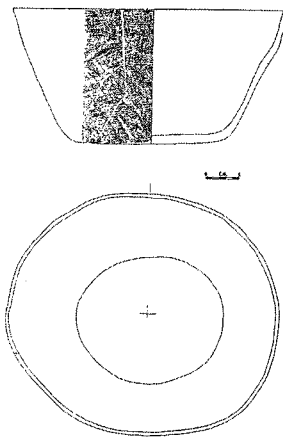
船浦貝塚は船浦湾の北側、海岸から約200メートル、船浦棧橋から約500メートルの石灰岩地帯下の湿地帯に面した砂丘上に形成されている。発掘調査の結果、石器を中心として、船釘や鉄器片が出土している。土器が一片も出土しない無土器の遺跡である。年代測定の結果、5~7世紀初期とされている。無土器文化の概念から、当時において、本貝塚の編年的位置づけに疑問を呈する向きがあった。(早稲田編年第一期)。現在では類似する他の遺跡との比較から妥当な数値とされている。



第3図

仲間第二貝塚出土石器・貝製品実測図

『沖縄八重山』より抜粋



第4図 平西貝塚出土の土器実測図

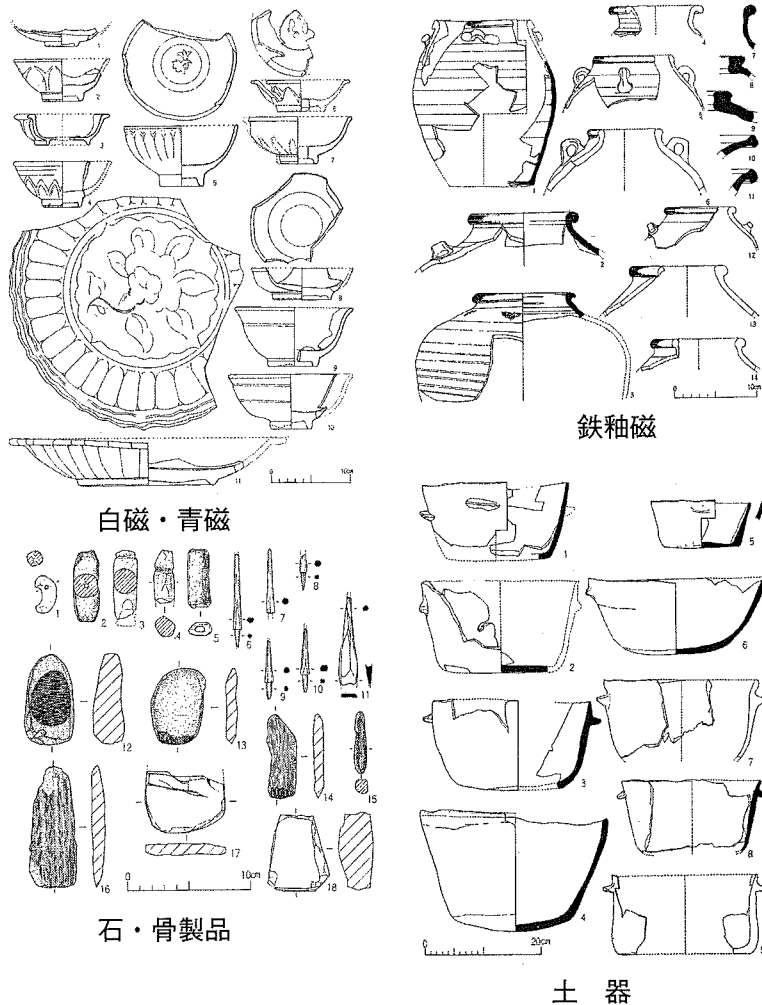
『沖縄八重山』より抜粋

## 五. 青山学院大学による発掘調査

1977年（昭和52年）には、青山学院大学による与那良遺跡<sup>註11</sup>、1980年（昭和55年）～1981年（昭和56年）には、成屋遺跡<sup>註12</sup>の発掘調査が行われている。両遺跡とも土器、陶磁器が出土する遺跡である。

### 与那良遺跡

旧与那良村落が位置していた場所、微高地に形成された集落遺跡である。広大な範囲を占める遺跡であるが、幹線道によって二分されている。遺跡の南側には水田がひろがり、北側へ高くなっている。八重山式土器を中心に外来陶磁器が多量出土している。（早稲田編年第三期）

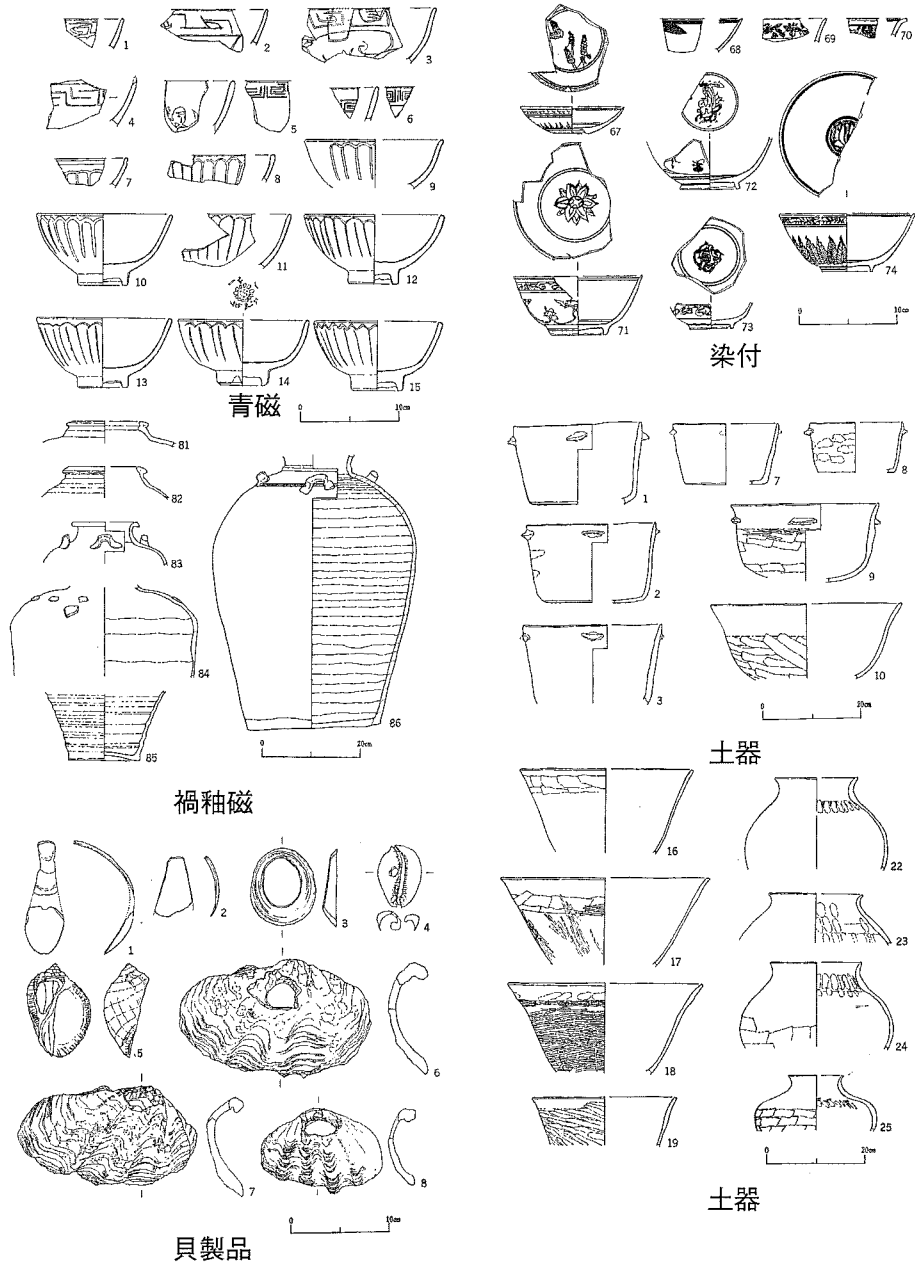


第5図 与那良遺跡出土遺物実測図

（『与那良遺跡発掘調査概報』より抜粋）

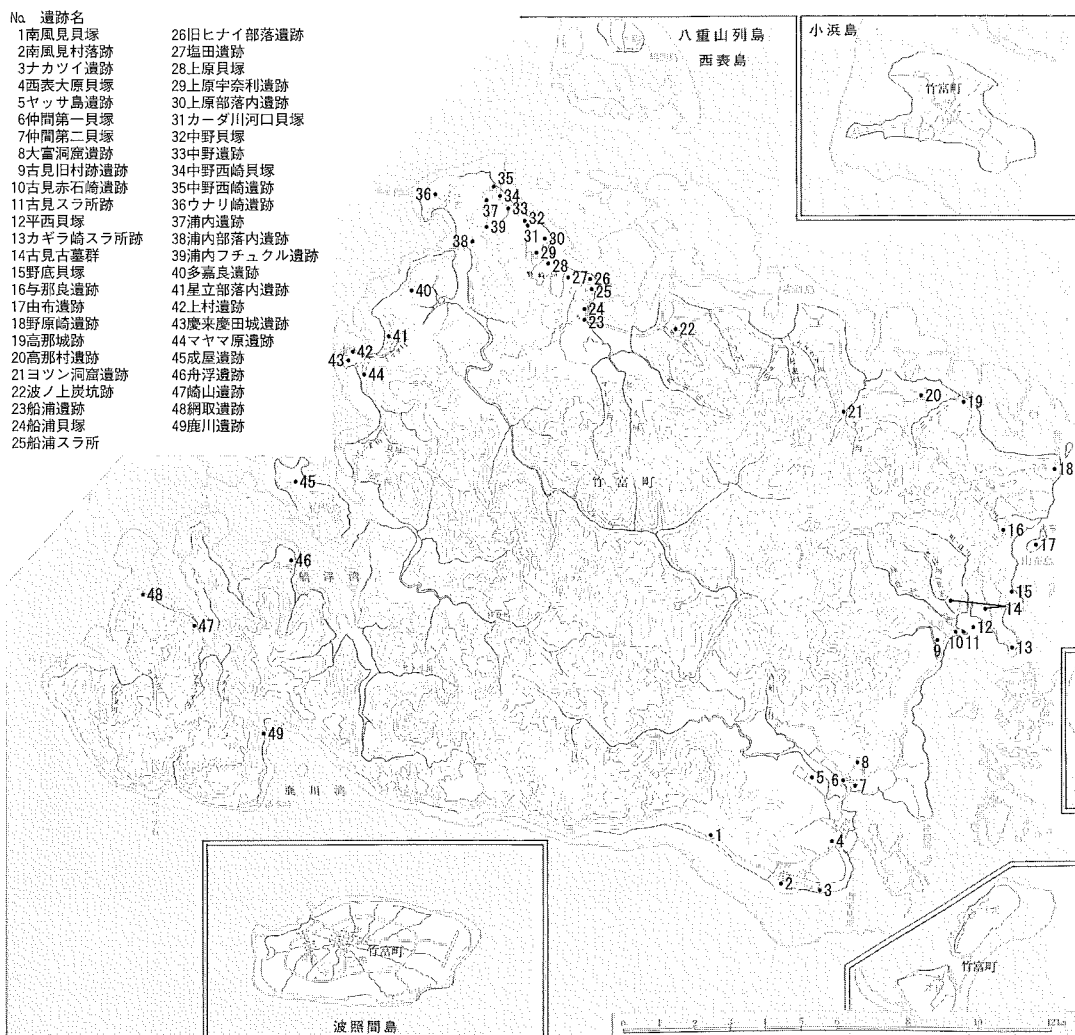
成屋遺跡

西表島西部の白浜集落の対岸に位置する内離島の北東海岸の標高 2 m 前後の砂丘地に形成された遺跡である。10箇所のグリッドを設定し発掘調査を実施している。その結果、溝状遺構と柱穴群が検出された他、八重山式土器、外来陶磁器などが出土している。(早稲田編年第III期)



第 6 図 成屋遺跡出土遺物実測図

(『西表・成屋遺跡発掘調査概報』) より抜粋



第7図 西表島遺跡分布図(『西表島、船浦スラ遺跡発掘調査報告』書を参照)

## 六. 西表島の遺跡の立地

西表島は、「低地部や段丘面の発達<sup>註13</sup>が狭小で、全体的に起伏の多い山地性の島である」。島の中央部には標高400m余の山々がそびえ立ち、山塊と深い谷によって地形が特徴づけられる。特に南風見から鹿川にかけての南西部においては、急峻な岩肌が海岸近くまでせり出しており、人間の生活を拒む厳しい地形となっている。これまでに確認されている遺跡の大半が、地形的な制約を受けており遺跡の立地に影響を与えている。島の南側から東側にかけては、珊瑚礁が発達しており、その大半が海岸砂丘地や低台地に形成されている。内陸部に遺跡が展開しているのはほとんど見られない。古見や祖納、星立などのように現集落に遺跡がオーバーラップしている場所もある。また、仲間川河口部や海中の独立島に遺跡が形成されている。



1980年に報告された遺跡分布調査の成果から、41箇所の遺跡が確認されている。旧石器時代に相当する遺跡は、未確認のままとなっており、縄文後期相当の遺跡を最古とする。1959年に早稲田大学学術調査団が発掘した仲間第一貝塚（八重山編年第Ⅰ期）と仲間第二貝塚（八重山編年第Ⅱ期）では、仲間第一貝塚を無土器遺跡として、八重山最古の遺跡として位置づけていたが、近年の調査からは石垣島の神田原遺跡（第Ⅰ期）と太田原遺跡（第Ⅱ期）との層序関係、下田原貝塚（第Ⅱ期）と大泊浜貝塚（第Ⅰ期）との層序関係など、Ⅰ期とⅡ期が逆転する現象が確認されている。西表島仲間第二貝塚からは下田原式土器（縄文後期相当期）が出土しており、八重山最古の土器が出土する遺跡として、最古の遺跡に位置づける編年修正案が発表されている。八重山先史時代の編年がこれまでの無土器の時期を第一期とし、下田原式土器を第二期とした早稲田編年が長く踏襲されてきたが、上記の遺跡からの文化層の逆転現象から、これまでの早稲田編年に修正が加えられている。

従来、西表島で確認されている遺跡の大半が、グスク時代の中・近世の集落遺跡となっている。

集落遺跡では古見旧村跡遺跡、高那村跡遺跡、星立部落内遺跡、上村遺跡、慶来慶田城遺跡など大規模な集落が形成されている。

## 七. 博物館総合調査における遺跡の概要

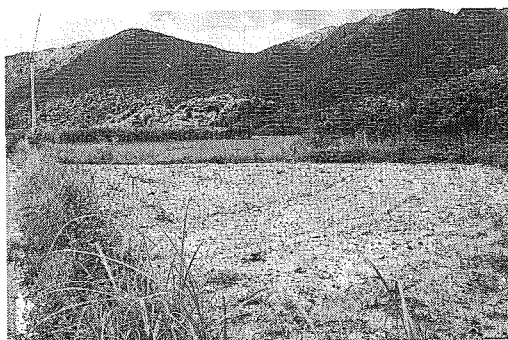
西表島における考古学的調査は戦前の早い時期から開始されたが、島の全域における遺跡の分布状況が把握されたのは、1979年の沖縄県教育委員会による竹富町・与那国町における詳細分布調査である。その成果は『竹富町・与那国町の遺跡—詳細分布調査報告書—』にまとめられている。両町における遺跡の数は113ヶ所、うち西表島で発見された遺跡が41ヶ所である。西表島で発見された遺跡数はその後、増加している。(49ヶ所) 今回の総合調査で確認した遺跡の大半は、1979年の調査で発見された遺跡の追調査であった。大方の遺跡の立地、保存状態に大きな変化は見られなかったが、中には開発行為により、遺跡が半壊もしくは全壊したものも見られた。今調査では、新たな遺跡の発見は出来なかった。時間的な制約もあり、49ヶ所全ての遺跡を確認するまでには至らなかった。表面踏査による現状把握に努めた。以下、主要な遺跡について概要を記述する。

### 西表島東部

#### 南風見貝塚

本貝塚は豊原集落から西方約2.5km距てた、標高約3mの砂丘地に形成された貝塚である。砂丘の北側は湿地帯で、その背後に標高100m前後の山々が東西に走っている。

1979年（昭和54年）の調査では、東西約200m、南北約60mの広範囲において遺物が散布している状況が確認されている。また、地点別に遺物の散布状況が異なり、貝塚の北東部においては、土器が認められないことから、無土器の時期を考慮しており、南西部では八重山式土器が採集されている。時期差をもった遺跡の存在を想定している。

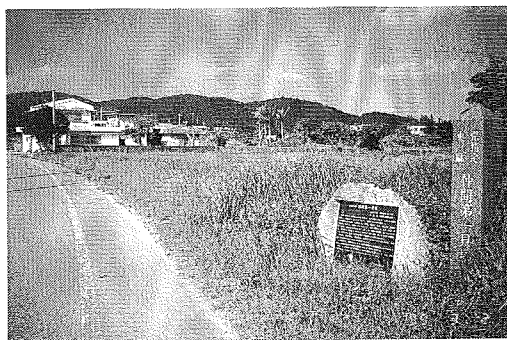


南風見貝塚

現状はキビ畑と牧草場が広がっており、その中にサラサバテイやヤコウガイ等の貝殻が散布している。幾度かの畑地の耕作で攪乱されており、保存状態は良くない。

### 仲間第一貝塚

仲間川河口部の大富集落側にある。現在の仲間川の橋のたもと一帯に広がる貝塚である。標高5～6mの砂丘地に夥しい量の貝が散布している。戦後米軍による橋梁架設工事の際に発見された貝塚であるが、その時点でかなり破壊されている状況にあった。1958年に多和田真淳・山城浩によって試掘調査が行われている。翌年、早稲田大学八重山学術調査団によって調査された。出土した遺物が土器を伴わず、石器のみが出土したことから無土器貝塚として位置づけている。さらに焼石が多く出土したことから、焼石調理法の存在を想定した。本調査以後、八重山最古の遺跡として編年されているが、1970年代の表面踏査から、時期的に新しくなることが指摘されている。その一つに開元通宝が採集されていることや、出土する遺物や層位との関係からこれまでの年代観に疑問を投じており、第Ⅰ期と第Ⅱ期が逆転することが確認されている。現況は道路の拡幅工事やキビ畑の耕作によって攪乱が著しい。（昭和31年 県指定史跡）



仲間第一貝塚



仲間第二貝塚

### 仲間第二貝塚

仲間第一貝塚の北東方約150m～200m貝塚である。現況はキビ畑が広がる。1979年

の分布調査の時点で耕作による攪乱が確認されており、地表面に多量の遺物が散乱している状況であった。今回の調査では、さらに攪乱が著しく遺物の細片化が認められた。本貝塚も下田原式土器が出土する時期と八重山式土器、陶磁器が出土する時期が複合した遺跡として捉えている。仲間第一貝塚同様、八重山の遺跡を代表する貝塚の一つである。県指定史跡部分を除き貝塚全体の包含層は必ずしも良好な状態ではない。(昭和31年 県指定史跡)

### 大富洞窟遺跡

大富集落の北側約500mのところの位置する洞窟遺跡。1979年の調査では、洞窟入り口右側の小ホールには石灰に覆われた人骨が発見されている。テラスの凹地にシャコガイの殻頂部を穿孔した、いわゆる貝錘の集積を確認している。

今回、再確認の目的で周辺の聞き込みをしたが、土地改良事業により周辺地形が大きく変貌していた。土地改良の際、洞窟に生息するコウモリの保護との調整から洞窟の保存問題が問われた遺跡である。現況は生息するコウモリへの影響がでないようにフェンス等が張り巡らされている。

### 古見赤石崎遺跡

古見集落の東側約350m～400mに突出した標高約10m前後の丘陵とその傾斜地に形成された遺跡である。台地から海岸側には陶磁器や土器、鉄滓、貝殻等が多量散乱しているのが見られる。遺跡内には清原御嶽があり、遺跡の中心をなす。1979年の詳細分布調査以後、大きな現状変更はない。遺物包含層が良好な状態にある。これ 古見赤石崎遺跡(台地)、古見スラ所跡(海岸)まで表面踏査で終わっており、試掘調査が必要である。特に台地上には鍛冶場の遺構が残っている可能性がある。海岸には砂岩が露出しているが、砥石として利用した溝跡が見られる。



### 平西貝塚

古見集落の北東方、約600mの位置に浮かぶ無人の小島で、島全体が遺跡となっている。島は琉球石灰岩から成り立ち海岸周辺に土砂が堆積している。潮の干満によって、古見の赤石崎海岸から歩いて渡ることができる。特に大潮の時には、大きな干潟ができあがる。

島の上には御嶽がありシロマタの神が祀られている。

1958年に早稲田大学によって発掘調査が行われた。今回は、干潮時を利用して島全体を踏査した。遺物は全体に散乱しているが、特に西側から南側にかけて、陶磁器、八重山式土器等の大形破片が夥しい量で散布していた。崩れかけた崖面にアラスジケマンガイの



平西貝塚

集積層が見られた。遺跡全体の保存状況については、人為的な破壊を受けたような大きな変化は見られなかった。(昭和31年 県指定史跡)

### 与那良遺跡

旧与那良村落があった赤土の台地に形成された集落遺跡である。遺跡の東側には由布島が対峙する。遺跡の南側には水田が広がる。一帯は畑地になっており、低丘陵地に陶磁器、八重山式土器片が多く散布している。1978年に青山学院大学による発掘調査が行われている。鉄製の釣針や骨製尖頭器、鍋型などの土器などバラエティーに富んだ遺物が多く出土した。遺跡の年代については陶磁器から14世紀～15世紀前半に位置づけている。

### 高那城跡

高那橋から東南側に約200m距てた海岸沿いの標高30mの琉球石灰岩上に形成された遺跡。三方の崖が険しく頂上に登ることが困難である。石垣等の遺構については確認出来なかった。遺物は海岸側の崖下に陶磁器や土器、貝殻等が堆積している。遺跡の年代については判然としない。城跡と呼ばれる場所は西表島でも高那城跡だけであり、グスク様な立地となっている。本城跡の北側には近世の高那村跡が広がっている。城跡の県道沿いには民間の開発行為により一部埋め立てられている。現在のところ城跡本体への破壊は見られない。

### 西表島西部

#### 船浦貝塚

船浦港から南西側へ約500m距てた湾奥の湿地帯に面した標高2～3mの砂丘上に形成されている。貝塚を取り巻く環境は前面に船浦湾が広がり、遠浅の砂泥性が広がる。1979年の分布調査では貝層が約1mの厚さで堆積しているのが確認されている。1971年～1973年にかけてリチャード・ピアソンによる琉球の考古学的調査の一つとして発掘を行っている。石器や貝器、鉄器等の他は土器が出土しないことから、無土器の遺跡として

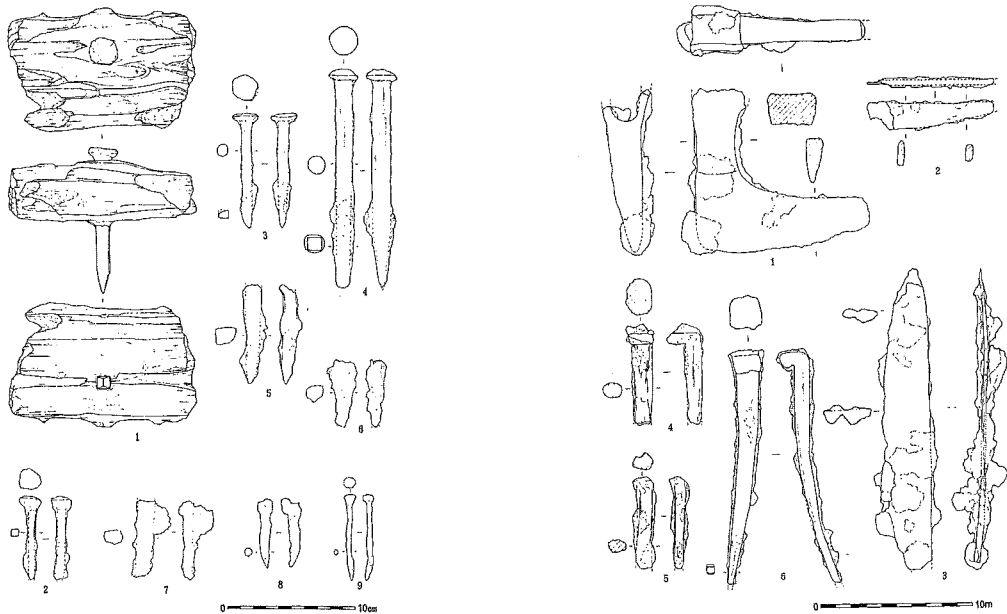
位置づけられていた。年代測定からは5～7世紀初期の年代値が測定されており、無土器文化の時期が新しくなることが確認されている。同様な第一期と第二期の時期編年が数ヶ所の遺跡で逆転する状況がでており、修正が求められている。遺跡の現状は建築資材やバラス、残土などのヤードとなっていることや、雑木が深く生い茂っていることから発掘調査時の状態を知ることができなかった。

### 船浦スラ所跡

本遺跡は1978年の「西表をほりおこす会」によって発見された造船所跡である。船浦港棧橋の陸地奥側の石灰岩が広がる一帯に多量の鉄滓が確認されている。一部防潮林が広がる。船浦港の物揚場及び港湾施設用地工事に伴って、1991年に沖縄県教育委員会によって緊急発掘調査<sup>註14</sup>が行われた。西表島では17世紀後半から18世紀前半に造船場が作られる。その役割をになっていたのが、古見のスラ所である。以後、首里王府への上納船の建設が最盛期を向かえる時期が18世紀前半から後半とされている。これまでの和船から



船浦スラ所



鉄製品 船釘

鉄製品 縦斧 1, 刀: 2, 包丁, 3, 船釘 4～6

第8図 船浦スラ所遺跡出土遺物実測図

(『船浦スラ所遺跡』)より抜粋

唐船に造船技術が変わった時期とされており、船浦にスラ所が開設される。1748年に臨時的に造船をする。1753年に本格的な造船所として使われ1889年頃まで機能していたとされている。「船浦スラ所の造船は、上原・高那<sup>註15</sup>・鳩間・西表・崎山・波照間・小浜の7ヶ村の百姓で分担し、幕末までこの体制が続いた」とされている。

発掘調査の結果、石列遺構が検出されている。これは古見スラ所にある「波消しの機能」<sup>註16</sup>として考えている。潮の干満を利用した波消しの遺構として捉えている。他に鍛冶炉や炭窯も発掘されている。船浦スラ所の終末期が把握されるなど貴重な調査成果を残した遺跡の一つである。スラ所の発掘調査は全国的にもあまり例がないことから、貴重な調査報告となっている。遺跡の現状は港湾工事により、消滅した感があり、発掘調査時の遺構を見ることはできない。

### 中野西崎貝塚

中野集落（公民館）から北西に約500m距てた道路沿いの砂丘地に形成された貝塚。無土器貝塚で、過去に10個のシャコガイ製貝斧が採集されている。貝塚は採砂でほとんどが破壊されている。現状では貝塚の位置を把握するのが困難である。周辺地には中野北西海岸に近世の中野西崎遺跡、集落内に中野遺跡、中野貝塚が点在するが、破壊されている状況にある。

### 星立部落内遺跡

星立集落内全域が遺跡が形成されていたところである。標高2～3mの砂丘地で旧村落遺跡の上に現在の集落がある。集落内からは陶磁器、八重山式土器、貝殻片が散布している。特に屋敷内や石垣の中に遺物が混在している。



星立部落内遺跡

### 上村遺跡

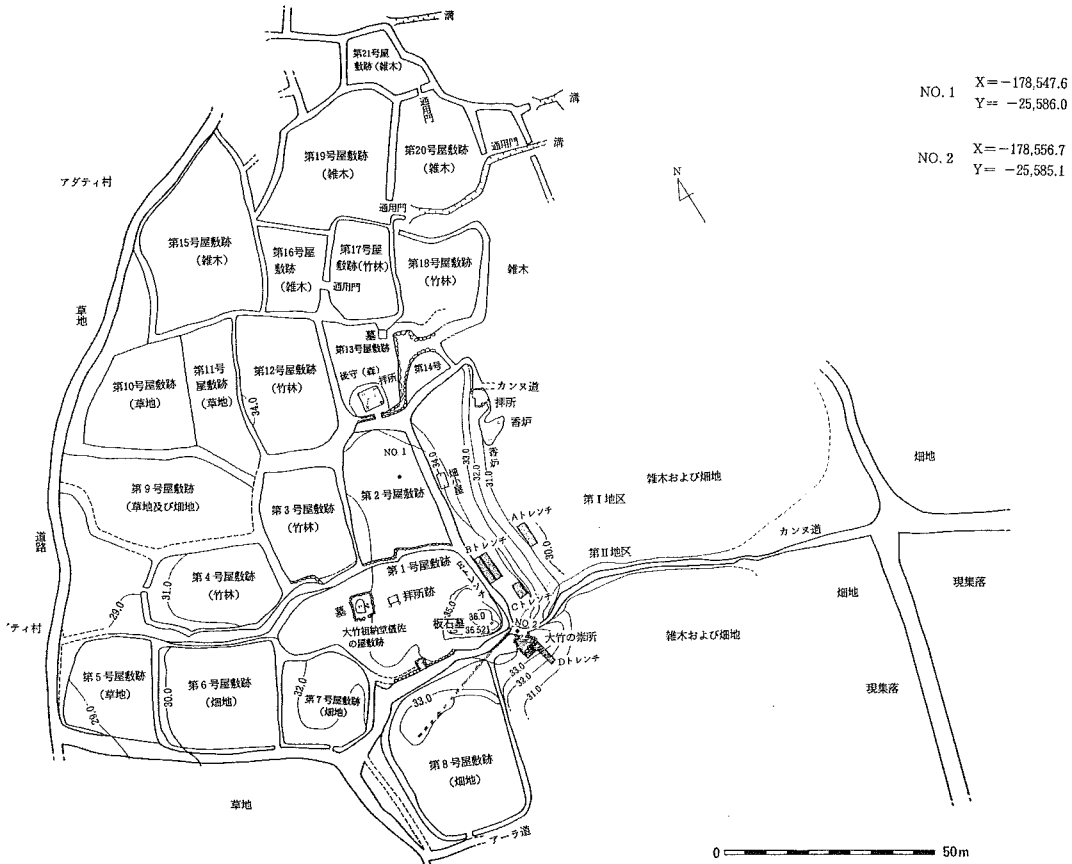
西表島西部祖納半島に位置する大規模集落遺跡である。沖縄県教育委員会が重要遺跡確認調査として、1987年～1990年までの<sup>註17</sup>3ヶ年間実施した。上村遺跡は1985年に大浜永亘によって発見された遺跡である。広い範囲において、陶磁器、土器、鉄滓等が散布している。調査地区を第I地区、第II地区と区分しトレンチを設定し発掘したところ、白磁・青磁・土器片が多量出土した。その他に天目茶碗や茶入れ壺の資料も得られている。白磁・青磁資料からは14世紀中頃ものが多い。地区によって時期差が認められるとし、



上村遺跡遠景



大竹祖納堂儀佐の拝所



第9図 上村遺跡地形図及びグリッド設定図

〔上村遺跡〕より抜粋  
 陶磁器全体から14世紀半ばから15世紀前半（第II地区）、15世紀末～18世紀（第I地区）の時期に形成されていたことが確認されている。陶磁器資料とは別に、出土した遺物の中で、特徴的なものとして鉄滓、羽口の出土があげられる。鉄滓や羽口は鉄との関連を示すものであるが、夥しい量の鉄滓から当時の祖納における鉄器製造の状況が把握されている。詳細な鉄滓の科学分析から鍛錬鍛冶（小鍛冶）を中心とした技術が想定されている。鉄滓



の中にも椀形滓、ガラス質椀形鉄滓、不定形滓、滴下滓、含鉄鉄滓などがある。第II地区とした拝所内からは小形の椀形滓の出土が多いことから、小鍛冶などが主だった技術であったと報告している。このことから上村遺跡において大規模な鍛冶工房跡を想定している。さらに報告書では鉄素材産地を分析した科学成分組成から、慎重論ながら揚子江流域の鉾山を一つの候補に挙げている。また、「鉄素材の成分調整の精錬鍛冶<sup>註18</sup>（大鍛冶）から鉄器製作の鍛錬鍛冶（小鍛冶）までがなされた」と報告している。祖納半島が鉄器製造と供給地であった可能性を指摘している。

### 慶来慶田城遺跡

西表島西部祖納半島の南側に位置する「慶来慶田城翁屋敷跡」地周辺をその対象とし、西表島の中世・近世を代表する集落の規模とその生活空間である屋敷内の建物構造、鍛冶などの生産場、近世支配体制の「伝薩摩在番跡」<sup>註19</sup>とされる屋敷等の発掘調査が行われている。沖縄県教育委員会によって重要遺跡確認調査として、1993年～1996年にかけて行われた。調査区は屋敷跡（第I地区）と「伝薩摩在番跡」（第II地区）に分けている。

遺跡が形成された時期は、陶磁器の資料から時代幅がある。「青磁からは<sup>註20</sup>鎬蓮弁文椀や線彫細蓮弁文椀があり、14世紀前半から16世紀」となっている。また、「白磁では玉縁碗<sup>註21</sup>やピロースクタイプ碗を含む13世紀中頃から14世紀中頃」の古手の資料も確認されているが、主体となる時期は15世紀末～17世紀までの資料で占められている。

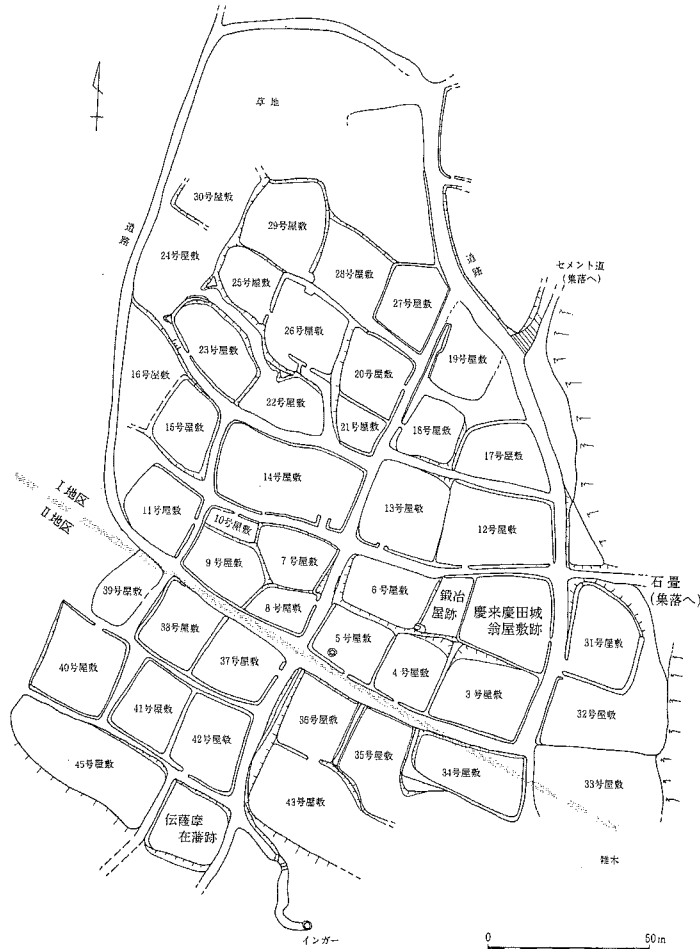
調査成果からは、遺構ではI地区の「伝鍛冶屋跡」で方形状石組遺構と周辺にピットが確認されている。方形状遺構の中からは人骨も検出されていることから、埋葬施設として押さえられている。人骨は20代から30代の男性とされている。上村遺跡より若干遅れて形成されたと想定されている。本調査では、屋敷の範囲測量図を作成しており、その実体が把握されている。特に「慶来慶田城翁屋敷跡」、「伝鍛冶屋跡」、さらに17世紀中頃に薩摩藩が駐屯していたとされる「伝薩摩在番跡」の測量を入れている。その比較検討した結果、時期差が考えられるとして「上村遺跡」で確認された石積みの整備、配列よりも「慶来慶田城翁屋敷跡」周辺に残された石積み、屋敷前の道等の整備が規格的かつ計画的な村づくりをした跡が見られるとし、「慶来慶田城翁屋敷跡」周辺の石積みや配置状況から伝承通り新しいものと結論づけている。

遺跡全体は国有地（旧陸軍省）で占められており、住宅等の構築物はない。石垣で囲われた旧屋敷跡がそのまま存在し、旧来からの集落形態が残されている場所は他に類をみない。祖納半島全体が、遺跡として包括されている。上村遺跡も含めて早急に史跡指定が急がれる。





慶来慶田城遺跡遠景



第10図 慶来慶田城遺跡屋敷配置測量図

(『慶来慶田城遺跡』) より抜粋

## 八. おわりに

西表島の遺跡を概観すると、ほとんどが海岸に近い低丘陵台地か海浜砂丘地にあり、集落遺跡によっては内陸部に展開する例もある。東部から西部にかけて同様な立地環境の中にあり、先史時代から中・近世の時期に至るまで前面に広がる珊瑚礁が生活の舞台となっている。八重山新石器時代の中で、西表島での最古の遺跡は下田原式土器と局部磨製石斧が出土する仲間第二貝塚であることはこれまでに述べてきたところである。現在のところ、それより古い遺跡は発見されていない。西表島は八重山諸島最大の島であることから、旧石器時代の遺跡が発見される可能性も残している。下田原式土器は波照間島下田原貝塚から出土した土器を指標とし、八重山先史時代最古の土器となっている。ちなみに下田原貝塚から出土した木炭やシャコガイを素材に、放射性炭素による年代測定<sup>註22</sup>の結果、貝： $3660 \pm 70 \text{yB} \cdot \text{P}$  ( $3550 \pm 65 \text{yB} \cdot \text{P}$ )、木炭： $3740 \pm 85 \text{yB} \cdot \text{P}$  ( $3630 \pm 80 \text{yB} \cdot \text{P}$ )の数値が得られている。仲間第二貝塚が下田原期に相当する遺跡であることはこれまでの遺物の検証から確認されているが、遺跡間によって出土する遺物のバリエーションに変化があり、文化様相の違いも指摘されている。また、土器の型態はその特徴から沖縄本島や九州地域などの、北の文化に求められるものではないとし、南からの土器文化の影響に祖型を求められるとしている。仲間第二貝塚からは、土器の他、局部磨製石斧が大量に出土している。また、下田原遺跡同様にイノシシの遺存骨や焼石が多量出土している。今後の調査によって、八重山先史時代の土器文化の編年体系、あるいはその源流がさらに整理されてくるものと考えられる。

仲間第二貝塚が形成された後の時期に続く遺跡として、仲間第一貝塚がある。無土器文化の中の(仲間貝塚文化)に相当する。年代測定のデータがないので、相対的な年代が把握されていないが、波照間下田原貝塚と大泊浜貝塚の出土遺物の比較検討や立地条件が類似しており、本貝塚の時代的位置づけが可能である。いわゆる下田原期に続く無土器の時期である。ちなみに、大泊浜貝塚ではD-22第6層で $1350 \pm 75 \text{yB} \cdot \text{P}$  ( $1370 \pm 75 \text{yB} \cdot \text{P}$ )、D-22第10層で $1770 \pm 70 \text{yB} \cdot \text{P}$  ( $1720 \pm 65 \text{yB} \cdot \text{P}$ )、G-22第11層では $1560 \pm 70 \text{yB} \cdot \text{P}$  ( $1510 \pm 70 \text{yB} \cdot \text{P}$ )の年代測定<sup>註23</sup>結果が得られている。また、G-22区では第1層から第22層までの層序が把握されており、表土から約3.4mの砂の厚さの中に4~12世紀の文化相が包含されていることが確認されている。今後、同時期の遺跡の年代の比較検討や編年作業における一つのメルクマールになる遺跡と考える。西表島では下田原期に属する仲間第二貝塚が形成された後、その後、長い年月の間吹き上げられた海岸近くの砂丘地に遺跡が形成されるようになる。仲間第一貝塚、南風見貝塚、仲野西崎貝塚が想定されている。この時期、食糧残滓としての貝殻、獣魚骨が多量に出土し大規模な貝塚を形成し、焼石調理を示す焼石遺構が顕著に出土するようになる。そのことから、東南アジアや南方先史文化

の影響下にあったことが考えられている。この時期弥生時代相当期～10世紀頃とされている。出土する遺物や遺構から沖縄諸島とその周辺離島においてみられる、縄文、弥生文化の影響下が及ぶことなく独自の先史文化が展開していった時期である。このように仲間第二貝塚から仲間第一貝塚、南風見貝塚、仲野西崎貝塚、と続く独自の展開を見せた八重山の先史文化が続いた後、グスク（八重山ではスク）時代を向かえる。首長層の台頭とともに、農耕社会の形成・鉄器生産、海外交易を基盤とする古代社会へと発展していく。これまでの海岸砂丘地に展開されていた生活空間が小高い丘陵台地に大規模集落が形成されるようになる。その特徴的な遺跡が慶来慶田城遺跡や上村遺跡、古見旧村跡遺跡、与那良遺跡等の集落遺跡である。これらの遺跡は陶磁器資料から13世紀頃から15世紀頃の時期を中心とした集落遺跡である。上村遺跡の大竹祖納堂儀佐や慶来慶田城の慶来慶田城用緒など、村立てをした人物が口碑伝承として伝えられている。両者とも祖納半島を中心として生活の拠点を築いている。天然の良港をひかえ、海外交易を有利に展開した力のある人物であったと考えられる。その証跡が、大量の陶磁器類と鉄滓の出土である。鉄滓の出土は鉄器製造を意味しており、その当時の社会において強力な影響力を持った人物であったことが想像される。上村遺跡や慶来慶田城遺跡の発掘調査から鉄器生産地とともに供給地として重要な場所であったことが確認されている。しかしながら、鉄材の入手ルートや鍛冶技術の工程、供給地との関連等、不明な部分が多く、これからの研究によるところが大きい。ただ、この時期に祖納半島が、東シナ海交易路の中に位置づけられていたことは確かである。たとえば海洋商人によって、陶磁器や鉄材などが、この地にもたらされた可能性がある。

## 引用・参考文献

1. 田代安定「琉球西表島古見村野ノ土器」『東京人類学雑誌』10号 1889年
2. 笹森儀助『南島探検』 1894年
3. 多和田真淳「琉球列島の貝塚分布と編年の概要」『琉球政府文化財要覧』 1956年
4. 『竹富町・与那国町の遺跡－詳細分布調査報告書－』沖縄県文化財調査報告書第29集 沖縄県教育委員会 1980年3月
5. 『沖縄出土の中国陶磁（上）－ジョージ・H・ケア氏調査収集資料 先島編』沖縄県立博物館 1982年3月
6. 『沖縄出土の中国陶磁（下）－ジョージ・H・ケア氏調査収集資料 沖縄本島編』沖縄県立博物館 1983年3月
7. 早稲田大学調査団『沖縄八重山』校倉書房 1960年
8. 註7に同じ

9. 註7に同じ
10. R.J, PEASON. S ASTO etal 「Excavations on kume and Iriomote, Ryukyu Islands」 Asin Perspectives. XX (I) 1978年
11. 与那良遺跡調査団『沖縄・西表島与那良遺跡発掘調査概報』 1982年
12. 青山学院大学成屋遺跡調査団「西表・成屋遺跡発掘調査概報」『青山史学』第9号 1987年
13. 新納義馬「西表島の自然環境I」『西表島天然記念物緊急調査報告I』沖縄県教育委員会 1983年3月
14. 『西表島 船浦スラ所発掘調査報告ー港湾施設用地工事に伴う発掘調査ー』沖縄県文化財調査報告書第101集 沖縄県教育委員会 1991年3月
15. 註14に同じ
16. 註14に同じ
17. 『上村遺跡重要遺跡確認調査』沖縄県教育委員会 1991年3月
18. 註17に同じ
19. 『西表島慶来慶田城遺跡ー重要遺跡確認調査』 1997年3月
20. 註19に同じ
21. 註19に同じ
22. 『下田原貝塚・大泊浜貝塚ー第1・2・3次発掘調査報告ー』沖縄県文化財調査報告書第74集 沖縄県教育委員会 1986年3月
23. 註22に同じ